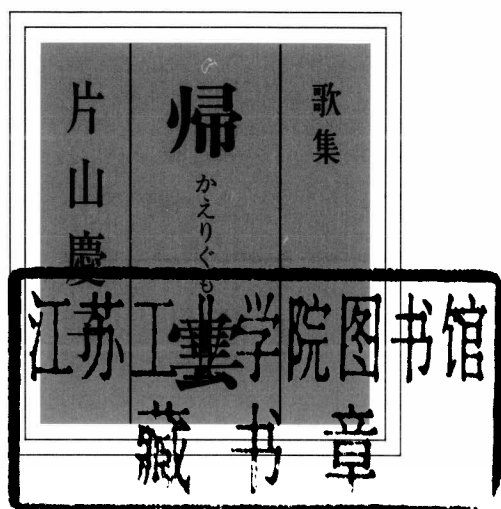


歸

雲



帰雲 かえりぐも

平成九年十一月二十五日発行

著者 片山慶子 よしこ

発行者 榎本好宏

装丁 林真伊

印刷・製本 株式会社キタジマ

発行 読売・日本テレビ文化センター

〒101 東京都千代田区神田錦町二丁目十一番七

電話〇三―三三九二―四六四一

落丁・乱丁本はお取り替えます

序 文

平岡
敏夫

歌集『かえりぐも帰雲』

の作者片山慶子さんは、群馬県立女子大学の保健室に昭和六十一年（一九八六）四月から勤務し、八百余名の女子学生健康管理を一手に引き受けておられる方である。その因縁で、今回処女歌集出版にあたり、序文をもとめられた。よろこんで承諾し、歌をすべて読ませていただいた。どの歌もどの歌も実にいいなあと感じたのであるが、すなおで気取ったところがなく、しかも的確な表現であると思った。これはなかなか大変なことで、並たいていの力ではない。

ところが、参考として作者の「あとがき」と御夫君の片山泰佑氏の跋文を拝見しておどろいたのは、御夫君ただひとりを指導者として歌を作ってこられたということで、跋文にも歌集を出すことになったのは「選者であり、指導者である私が薦めたからである」とある。また「あとがき」にも「私の師は、同居人である夫ですから、私の都合の良いときに、夕食など多少の時間をみて、また旅行先の宿で指導してもらうこともありました」とある。こういう例は、一般にはあまりないことで、すばらしい話である。その指導ぶりは、昭和四十七年五月、朝日新聞上毛歌壇の斎藤喜博選に、最初に詠んだ歌

がトップに掲載されたことでもわかる。

ライラック 我が家の庭に移し植ゑ北支那万寿山わが懐かしむ

「あとがき」にくわしい解説があるが、片山さんは二十歳ごろ日本赤十字社救護要員、つまり従軍看護婦として、北京の陸軍病院に勤務しておられ、北京最大の公園頤和園いわえんにそびえる万寿山に出かけることもあったのである。私はこの「あとがき」を読んで、深い感銘を受け、何度か涙を禁じえなかったが、うら若い日赤従軍看護婦としての戦争体験は、この歌集の核というべきもので、今なおしばしば鮮烈な追憶として片山さんの胸裡に蘇っている。

結核濃厚感染したる石川澄子よ十九歳共に励まし合ひし従軍看護婦なりき

石川澄子さんは、北支に派遣される前年の昭和十七年、三浦半島の野比海軍病院の結核病棟に配置され、濃厚感染し、十九歳で死去している。

軍の密命に宇品港より出港し^{をとめ}処女の我は中国に行く

もつと話せば悔いがなかった父と四十四年前東京駅の別れ

眠れぬ夜はもう一度父に会ひたかりき異国にゐて別れに会へざる父に

父の死も知らず北京に居りたりき二十一歳従軍看護婦われは

日赤の看護教育中の面会者はつねに父親で、外泊許可の帰路は父の自転車
の荷台で東武の駅まで送ってもらったとあるが、無事復員したときは一番先
に墓前にこまごまと報告、墓標に手を掛けて泣いたという。私はすぐ上の姉
が日赤の看護婦で、内地の海軍病院に勤務していたし、「火筒の響き——女
性・看護婦・赤十字——」という論文を発表したこともあるので、片山さんの
歌にいっそうひかれるのかも知れないが、「敗戦の日は手榴弾配られて自決
に備へたり従軍看護婦我ら」といった歌が示すような戦争体験は、今後もう
たい継がれ、語り継がれて、平和はかたく維持されなければならないと思う。

田園に建つ女子大学には雲雀上がり夏には蛙の声も聞こゆる

女子大卒業式に今年は花束贈られぬ早かりし四年の仕事回顧す

下総より今朝来し大学受験生発熱三十八度にも起きて試験会場へ行きぬ

四年間お世話になりましたと花束を持ってきたが、「今年は」とあるように、お世話になっても忘れることもある当今の女子大生である。片山さんは戦後、群馬県庁職員となり、太田保健所に勤務、退職後は社会福祉法人希望の家療育病院の総婦長を経て、県立女子大学嘱託となって現在に至っている。

懐かしき亡き姑^{はは}の遺品の前掛けをちよつと借りてみました夕食の時

交替しつつ運転して行く北陸道姑^{はは}の故郷に秋深きかな

命ありて今も悩めば眠れずに吾^わを生みたまひし母の恋ほしも

満たされし老いの晴天の楽しみは干したる布団に入りて寝るのみ

冬一番の冷え込みに夫を起こさずそうつとそのまま出勤す我は

ほんとうにいい歌ばかりである。右の第一首のような、どこかユーモア、

おかしみもある歌もたいへんよいが、リアルにとらえられた日々の生活が片山さんの人柄、人間味と相俟って、いい歌になっていると思う。

空つ風冷たき上州の野に立てば赤城の存在感に我はうたれつ

赤城山に乱れし雲ある朝なれば日本海の荒れる空を偲びぬ

赤城・榛名・妙義の上毛三山は、私も大好きな山であるが、片山さんの用いた「存在感」という言葉には、生まれ育った上州の風土への深い愛着が感じられる。

死ぬまで青春と言へども夫よ北陸道七日間の運転疲労隠し給ふな

四十二歳に契約したる養老保険満期となりぬしみみわれは七十二歳

片山泰佑氏は長く教員を勤められ、教頭にもなられたが、すぐれた歌集『残花』（角川書店）を刊行されている。土屋文明・斎藤喜博の指導を受け、作

家・井上光晴の文学伝習所の全国事務局を担当し、井上氏の「辺境通信」を発行しておられた方である。夫君の懇篤な指導と本人の努力、天性の人間味と才能により、歌集『帰雲』はめでたくここに誕生した。「帰雲」の語は杜甫の詩「返照」^{へんしょう}に出てくるが、夕方に山に帰ってゆく雲のことである。遠く中国より上州へと帰って来た片山さんの、「鰯雲鯖雲あれど秋刀魚雲なき夕べの雲を見つつ家路に急ぐ」日々の思い、そしておのずから悠久の彼方へと帰ってゆく心が、この『帰雲』にこめられているようにも思われる。

二十代、三十代の人のように若々しく、はりのある声の片山さん、さらに第二、第三の歌集を御夫君と共にめざして下さい。

（群馬県立女子大学学長）

平成九年十月

目次

序文	平岡敏夫	1
第一章	従軍看護	13
第二章	新田山	37
第三章	阿波すだち	65
第四章	千光寺の鐘	95
第五章	命ありて	121
『帰雲』について	片山泰佑	146
あとがきに代えて		152

歸
雲

片山慶子歌集

第一章

從軍看護

